

大阪医科大学脳卒中センターにおける急性期脳卒中への治療戦略と実際

矢木亮吉

(大阪医科大学脳神経外科教室)

脳神経外科疾患の中でも、急性期脳梗塞やクモ膜下出血などの早急に対応が必要な脳卒中疾患に対する、治療戦略、および取り組みにつき報告する。

近年、脳神経外科手術の中でも血管内治療の発展に伴い、新たな治療戦略が導入され、治療の選択肢も多彩となっている。特に脳梗塞に関しては発症から治療までの時間経過によって、患者の後遺症や予後が劇的に変わってくる。当院脳卒中センターでは、急性期治療の基幹病院として、当直及びオンコール体制にて 24 時間の受け入れ態勢を実行し、来院後数十分以内で脳卒中治療開始を可能としている。

超急性期脳梗塞に対する rt-PA 療法をはじめ、その無効例や適応外症例に対しても、血栓除去デバイスの認可により救急処置が可能となり、良好な治療成績を得た症例も経験している。また、くも膜下出血に関しても、開頭クリッピング術だけではなく、侵襲が少ない血管内手術も導入され、高齢の患者であっても緊急手術を行い、治療成績も向上している。

さらに今後、血管内治療領域において新たな治療デバイスが認可される予定となっている。

当院脳卒中センターにて実際に経験した急性期脳卒中症例 2 例を提示するとともに、今年度中に認可される新規治療デバイスを紹介する。